The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	松山先生を懐ふ
Author(s)	加藤, 盛一
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 25-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88738
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

松山先生を懐ふ

加藤盛一

先生は極めて眞面目な方であり、また非常に嚴格な方でありました。そこで我々學生としては、どちらかと云へば非常に窮窟な先生だと云ふことを常々感じて居りました。ところが先生が廣島の高等師範學校で國漢の主幹と云ふ役をつとめて居られました時、同級の者の中で、或る二三人が國漢の幹事を致しまして相談の爲に時々先生のお宅へ呼ばれた事がありまして、さうして家庭的に接して見ると、先に考へて居つた先生とは全然樣子が違つて、洵に温厚で慈父のやうな感じを持たせられて、どうも本當にいゝ先生だなアと云ふ事を痛切に感じたやうな事であります。此の時などは一年二年三年を通じて九人許の幹事が同時に押しかけたことでしたが、特別に茶菓などを個人別に用意して置いて極く打ち解けて寛いでお話して下さつたことでして、教場と全く反對なんです。だから胸襟を開いて會務の相談も出來ましたことであり、又其の高風に感激させられたことでした。

先生の受持の中で一番我々の苦しんだ學科は漢籍解題と云ふのを二年間課せられた事です。それは

それをまる暗記させられるので、嘗て『面倒いから試驗だけは止して下さい。』と云ふことを要求したのですけれども、先生は頑として應ぜられなかつた。併し後から考へて見ると非常に有益でした。大体書物の研究の方法などを丁寧に教へて下さつて、試驗は難しかつたけれども、確に試驗をやめなかつたことが深切な考へであつたと云ふことが、後には能く分りました。又そんな面倒いものであつたから、隨分飛んでもない答案を書いたのですが、しかし先生はそれがために落第をさしたやうな事は一人としてもなかつたやうです。其處に嚴重な所もありまた寛大な所もあつたやうです。又質問をしても決して胡麿化すと云ふ樣な点がなくて極めて正直な先生であつたことは誰人も同感であらうと存じます。

先生は柔道の方の世話をよくせられて居りましたやうに思ひます。武道の會の時などには、いつでも眞面目に出席して始終熱心に指導して居られました。授業などに就てもちつともお休みになることがなかつたのであります。

私個人としては夏休みなどには先生に特別に澤山の本を貸して貰つて、持つて歸つて讀んだやうな事がありまして、非常にありがたく感謝して居ります。ところが先生が九州の大學病院で腹部の大手術をせられたことがありました。其の頃は私は復學生生活をして居つた時で、さう云ふ大病をせられたことを仄かに聞きましたが、お見舞の品も送り得ず先生に對して禮を缺いたと云ふことをつく〳〵感

じて居りました。それで大阪に來られましてから、偶京都へお出でになればつとめてお會ひして前からの感恩の心を現し、又懷德堂で記念の催しがあると云ふやうな時には、多くの場合行つてお邪魔さして貰ひまして、なるべく先生に接近するやう力めて居りました。大正十一年に孔子の二千四百年祭を行はれました時にも滋賀縣から出掛けて參りました。最近には舊懷德堂二百年記念祭の時に、生徒を連れて旅行中でありましたが、恰度時間の利用が出來たから、今一人の引率の先生に万事を托して、一寸立寄つて講演を聽かして貰ひ又親しく先生のお眼にかゝつて久濶を謝した次第です。

今度も當大學文學部の教官室で狩野先生から先生が御病臥になつて居られると云ふことを聞きまして、さて翌朝お見舞を出さうと思つた時には、早や新聞で御他界なされたと云ふことを見まして洵に喫驚したことであります。其處で早速同志に談合ひまして、弔慰の方法を講じたいと云ふやうな事は考へて居りますけれども、微力の者で何の事も出來ませんが、其の心持だけは有つて居るつもりであります。と申しますのは自分共の教へた生徒が自分共に對して、いつ迄も忘れないで手紙でも寄越してくれると云ふことが、樂しいことの無上のものであります。其處で我々も子を持つて知る親の恩と云ふやうな意味で、矢張り其の子供から受けるありがたさを、先生にはいつでも有つべきである、恩を忘れてはならぬと云ふ心だけは有ちたいと思つて居るからであります。どうか先生の靈は御遺族の方を護つて、其の方の未來が多幸であらせられる樣門弟の一人として衷心お祈り致す次第であります。同時

に先生の計畫せられたことが、益發展して、懐德堂が愈盛大になることを切望する次第であります。

先生の文學博士になられだと云ふことも、御逝去になつたと同時に聞いたので、其のお祝の辭も差し上げることの出來なかつたのを自分としては心殘りとする所であります。（藤塚誠二筆記）

松山先生を憶ひ奉りて

岡井愼吾

私が松山先生の御提撕を受けたは明治三十七年四月から大正五年三月まで廣島高等師範學校に奉職した十一年の間で有る。

三十七年四月に高等師範の學級が揃ひ、附屬中小學校が開かれて、その形が整つた。私は附屬中學校の教員として參つたので、先生は本校國語漢文學部の漢文科主任で有られた。漢文科には松平良郎、三宅少太郎の兩先生も居られたが、此兩先生は舊い御方だから、先生は主として漢文學史漢文法などの方面を受け持たれた。

附屬中學校は普通の中學校の樣に文部省の定めたまゝを守るのでなく、特殊の研究をして中等教育